

第IV章 河田山1号墳の発掘

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00060491

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



第Ⅳ章 河田山1号墳の発掘

1. 調査の経過

第1次発掘(1982年)

墳形・規模・外部施設の有無等を明らかにするため、墳丘測量、トレンチ発掘を行った。

調査日誌(抄)

7月21日(晴れ)

機材搬入。伐採。写真撮影。

7月22日(晴れ)

杭打ち。測量開始。

7月23日(晴れ)

トレンチ設定(S, Ge, Gw, Ee, Ew, N)。発掘開始。

7月24日(曇のち雨)

Ee トレンチより土器出土。

7月25日(雨)

Ee トレンチより土器出土。

7月26日(曇)

Ee, S トレンチより土器出土。

7月27日(晴れのち曇)

H トレンチ設定、発掘。S トレンチより土器出土。

7月28日(曇一時雨)

F トレンチ設定、発掘。現地説明会。宿舎で町民の方々と懇談会。

7月29日(晴れ)

写真撮影。主軸線に沿って墳丘断面図作成。土層図作成。

7月30日(晴れ)

埋め戻し、清掃(終了)。

第2次発掘(1983年)

1次調査で明らかにできなかった墳裾部・くびれ部の確認、出土土器の年代決定のため、トレンチ発掘が行われた。

調査日誌(抄)

7月21日(曇)

機材搬入。伐採。写真撮影。主軸線の杭の打ち直し。トレンチ設定(Ne, Ee, Fe, See, Ses, Sw, Fw)。

7月22日(雨のち曇)

発掘開始。

7月23日(曇)

Sw, Ee, Ses トレンチから土器出土。杭レベルの計測。Nw トレンチの設定

7月24日(曇時々雨)

Fe トレンチより土器出土。杭間の水平距離の計測。Ne2 トレンチの設定。現地説明会。

7月25日(曇時々雨)

Ee, Sw トレンチより土器出土。See トレンチで溝状遺構を確認。I トレンチ設定、発掘。

7月26日(曇時々雨)

I トレンチで溝状遺構を確認、土器出土。各トレンチで清掃、土層図作成、写真撮影。

7月27日(曇時々雨)

埋め戻し、清掃。現地での最終ミーティング(終了)。

2. 墳丘の調査

1) 立地と調査前の概況

河田山1号墳は石川県小松市河田谷内町に所在する前方後方墳であり、加賀地方のほぼ中央を横切るように流れる梯川と、その交流の鍋谷川にはさまれた平野部に、半島状に張り出した丘陵尾根上に立地するものである。この尾根は1号墳々頂で標高50mを測り、西側・南側斜面は急傾斜をなしている。

この尾根付近の丘陵上にもいくつかの古墳が築かれているが、河田山1号墳はそれらとは独立し、最高位に立地するものであり、墳頂部に立つと、南西には梯川流域の一連の平野が一望でき、西には広大な加賀平野、更には遠く日本海をも望むことができる。このように河田山1号墳は発生期古墳としては申し分のない位置に立地しているものであると言えよう。

調査前の状態では、この古墳は盗掘塚などがみられず、また雑木で覆われていたため見通しはあまり良くなく、自然地形との区別は必ずしも明瞭とは言えなかった。

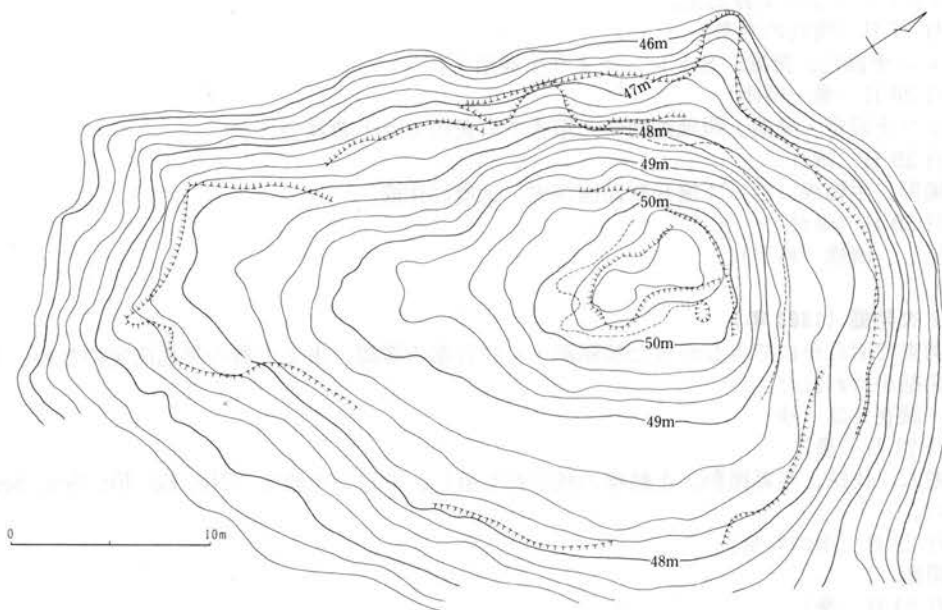


図12 河田山1号墳調査前の墳丘実測図

しかし本墳は、発見当初より前方後方形の墳形を持つものとみなされており⁽¹⁾、当研究会の事前の分布調査においても、前方部を南西に向けた前方後方墳であろうと推定されていた。

2) 墳丘の規模と構造

本墳は尾根自然地形を最大限に利用して造営された前方後方墳である。前方部を南西に向け、

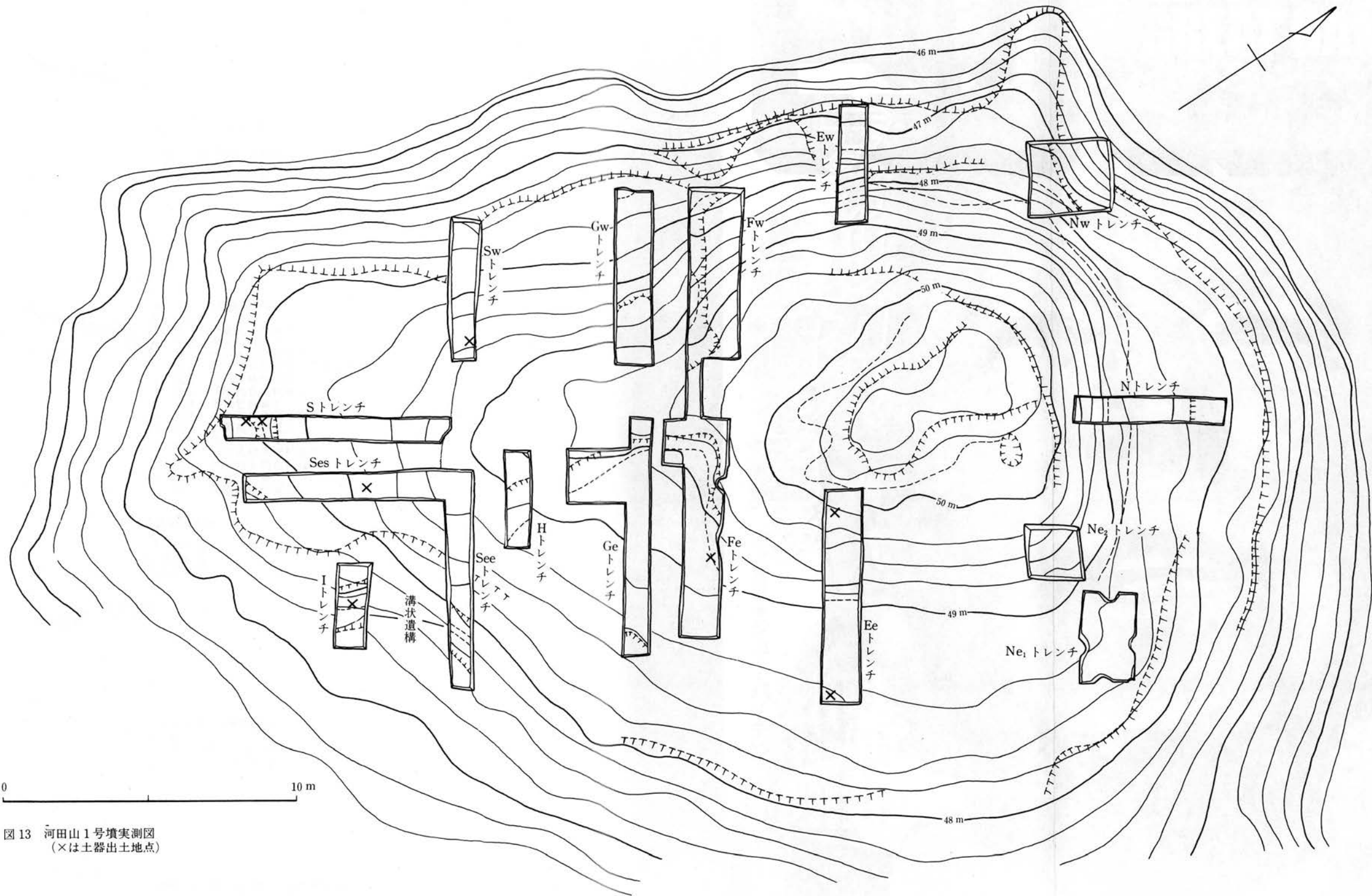
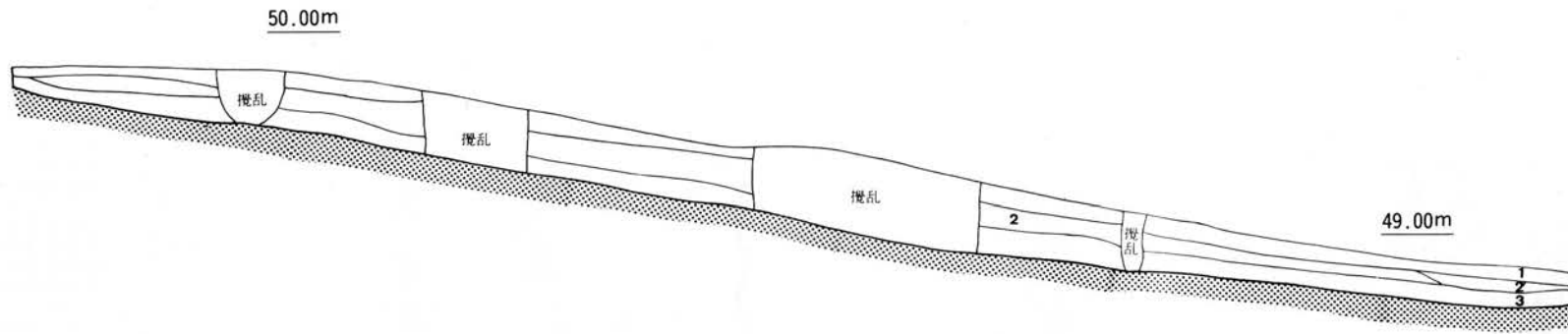
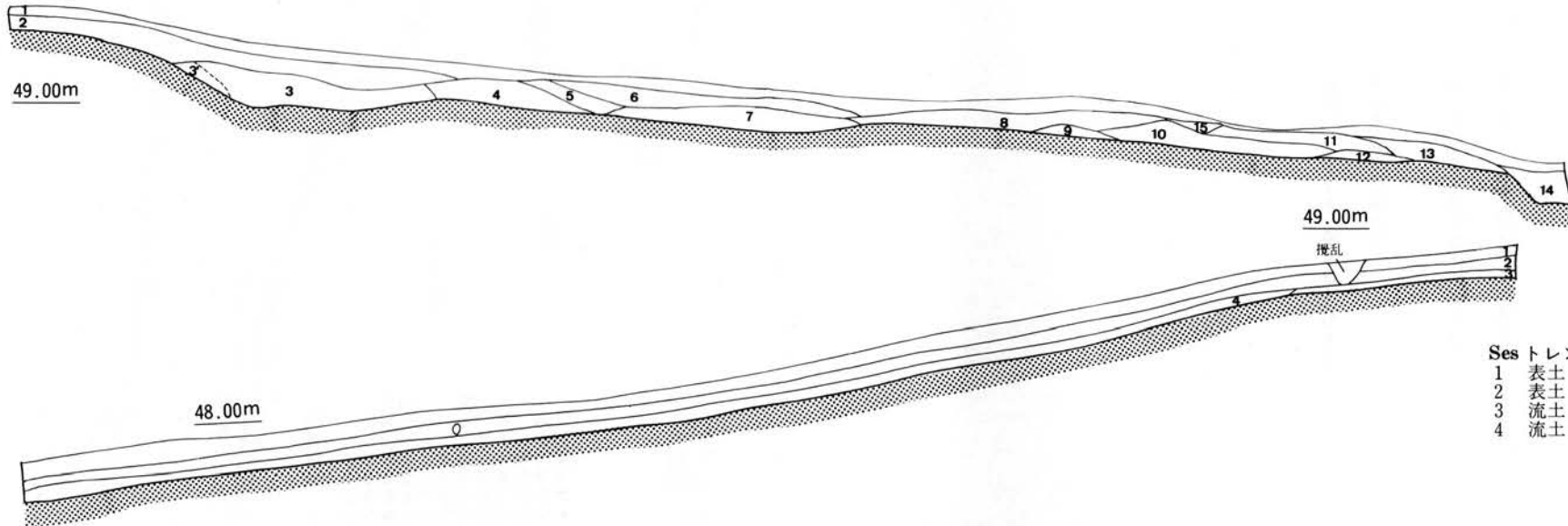


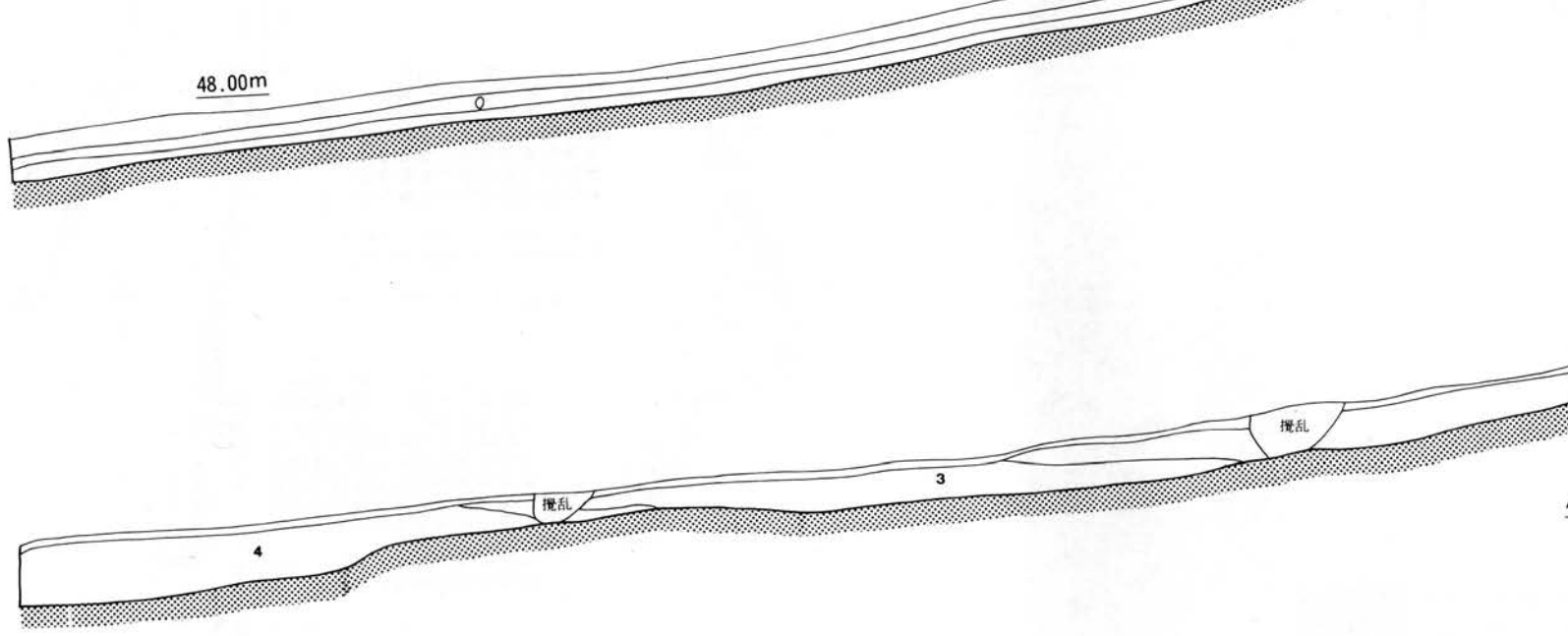
図13 河田山1号墳実測図
(×は土器出土地点)



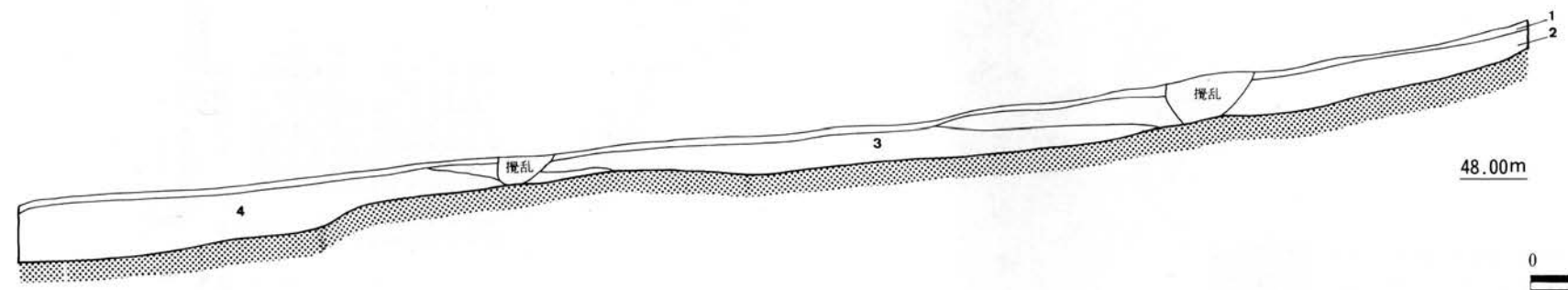
- Fe トレンチ 北壁断面図**
- 1 表土
 - 2 流土 暗黄褐色弱粘質土
 - 2' 流土 暗黄褐色弱粘質土 (2より堅い)
 - 3 流土 灰褐色弱粘質土



- Ge トレンチ北壁断面図**
- 1 表土
 - 2 流土 明黄褐色砂質土
 - 3 流土 黒褐色砂質土
 - 4 流土 明灰黄褐色砂質土
 - 5 流土 明灰黄褐色砂質土 (4より脆い)
 - 6 流土 暗灰黄褐色砂質土
 - 7 流土 暗灰褐色弱粘質土
 - 8 流土 茶褐色砂質土
 - 9 流土 明赤茶褐色弱粘質土
 - 10 流土 赤茶褐色粘質土
 - 11 流土 茶褐色砂質土
 - 12 流土 明赤茶褐色弱粘質土
 - 13 流土 明赤暗茶褐色粘質土
 - 14 流土 黄褐色粘質土
 - 15 流土 暗茶褐色砂質土



- Ses トレンチ 西壁断面図**
- 1 表土
 - 2 表土 黄褐色弱粘質土
 - 3 流土 明赤褐色粘質土
 - 4 流土 黄茶褐色粘質土



- S トレンチ 西壁断面図**
- 1 表土
 - 2 流土 暗灰茶褐色砂質土
 - 3 流土 暗茶褐色粘質土
 - 4 流土 明灰褐色粘質土



図 14 河田山 1 号墳土層断面図 (1)

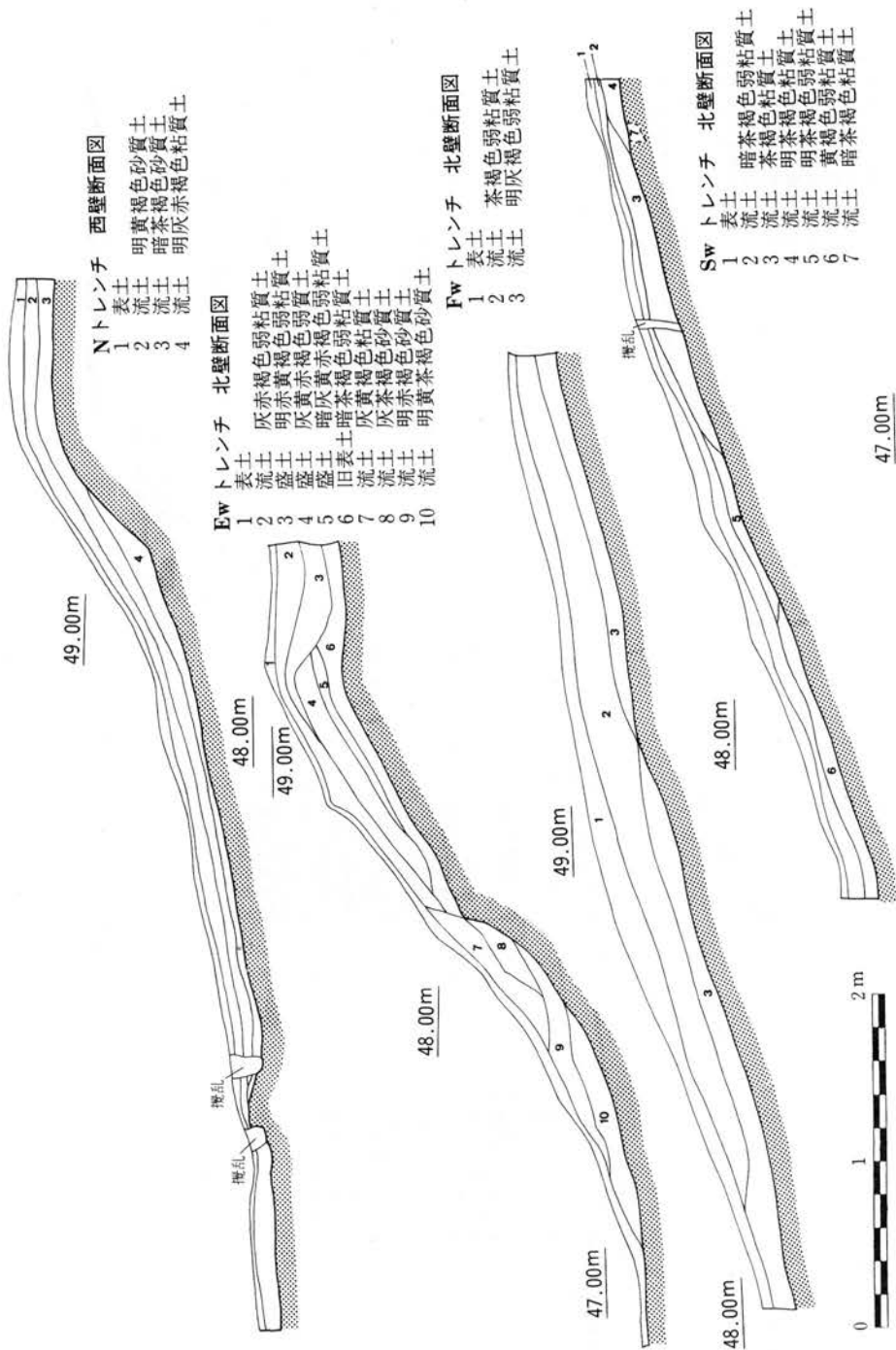


図 16 河田山 1 号墳土層断面図(3)

主軸方向をN 33°Eに測る。

前方部は、くびれ部から離れるに従ってバチ形に開き、後方部からなだらかに移行して前端は不明瞭になっている。後方部は、墳丘の最高所である頂部で正方形、裾部では主軸と直角方向にやや長い長方形を呈している。墳丘の周囲にはテラス面がめぐるが、墳丘全体が尾根中央よりも、西側の平野寄りに造られているため、西側では狭くなっている。

規模は、全長約 25 m、後方部長約 14 m、後方部幅約 15 mで、前方部前端幅は不明確ではあるが、およそ 10 mと考えられる。くびれ部幅は頂部で約 2.2 m、裾部で約 3.3 mと狭く、高さも約 0.4 mである。くびれ部の輪郭は平野側の西側よりむしろ東側で明瞭である。後方部高はテラス面との比高が北側で約 2.5 m、東側で約 1.7 m、西側で約 3.5 mで、東側裾と西側裾とは約 1.8 mの比高差がある。前方部は後方部からの比高が約 1.0 mであるが、両者間には明確な区画はみられない。

墳丘は、後方部に若干盛土による築成がみられる他は、主に地山の部分的な加工・成形よりなっている。Ee トレンチで検出された盛土は灰茶褐色粘質土で、トレンチ西端で約 26 cmの厚さがある。Ew トレンチでは 3 層の赤褐色粘質土が検出され、トレンチ東端で約 32 cmの厚さがあったが、およそ標高 48.0 m以下における成形は、全て地山の部分的な加工によるものであろうと考えられる。

埴輪・葺石・周溝等の外部施設は検出されなかった。一方、墳丘表面の流土中には弥生土器と考えられる土器の細片が数箇所に見られ、また See, I トレンチの前方部南側のテラス面を隔てた箇所より、幅約 1.3 m、深さ約 0.5 mの同じ弥生土器を含む溝状遺構が発見された。しかし後述するように、これらは本墳と直接的な関係を持つものではないと考えられる。

3. 出土遺物の観察

出土した土器は 20 数点あり、全て弥生土器と考えられるものである。これらは小さな破片ばかりであり、器種・部位の判明するものは 8 点のみであった。確認できた器種は、甕・高坏・器台・蓋形土器に限られている。

次に土器実測図に対する観察表、トレンチ別の出土状況、器種別の観察を示す。

土器観察表

No	器種	法量 (cm)		手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径器高					
Ee トレンチ出土土器								
1	甕	17.9	— — —	口縁部：外／ナデ。擬凹線4条。内／ナデ。	明黄褐色	やや良	良	胎土は1.0mm大の砂粒を含む。外面に煤が付着。
2	高坏	— — —	— — —	脚部：外／ハケ。内／ナデ。	明黄褐色	良	良	一部が赤色を呈す。顔料が塗布されたか。
3	蓋	— — —	— — —	鈕部：内外／不明。	暗黄褐色	やや良	やや良	0.5mm大の砂粒を含む。摩耗が著しい。
Fe トレンチ出土土器								
4	脚部	—	14.2 — —	内外／ナデ。	明黄褐色	良	良	透穴数不明。外面は摩耗が著しい。
I トレンチ出土土器								
5	甕	— — —	— — —	口縁部：外／ナデ。擬凹線約9条。内／ナデ	外／明黄赤褐色。内／暗＼	やや不良	良	胎土は1.5mm大の砂粒を含む。
6	甕	17.1	— — —	口縁部：外／ナデ。擬凹線約6条。内／ナデ	外／明黄茶褐色。内／暗＼	やや不良	良	胎土は1.0mm大の砂粒を含む。
7	甕	— — —	— — —	口縁部：外／ナデ。擬凹線数条。内／ナデ。	明黄褐色	やや不良	良	胎土は1.5mm大の砂粒を含む。摩耗が著しい。
Sw トレンチ出土土器								
8	底部	— — —	— — —	外／へらみがき？ 内／へらみがき	外／明茶褐色。内／黒色	やや不良	良	外面は摩耗が著しい。

各トレンチでの土器出土状況

Ee トレンチ：土層観察図上の4黄茶褐色弱粘質土中より部位・器種不明の土器2片が出土し

た他は、ほとんどの土器(10数点)は11暗黄褐色弱粘質土中より出土している。

Fe トレンチ：トレンチ西端より478cmを測る3灰褐色弱粘質土中より、土器1片が出土。

I トレンチ：13茶褐色粘質土中より炭化物とともに土器多数が出土。

Sw トレンチ：7のピット状の窪みから土器数片が出土。

Ses トレンチ：トレンチ北端より3.6mを測る、地山面上より、器種・部位不明の土器出土。

S トレンチ：トレンチ北端より6.3m、6.9mを測って2片の土器が出土。

器種別の観察

甕形土器 口縁帯部に擬凹線を持つもの(1、5、6、7)がある。中でも1、6、7の土器は口縁帯部が直立または若干外傾し、頸部の屈曲は鋭く、ほぼ直角に口縁部から頸部に移っ

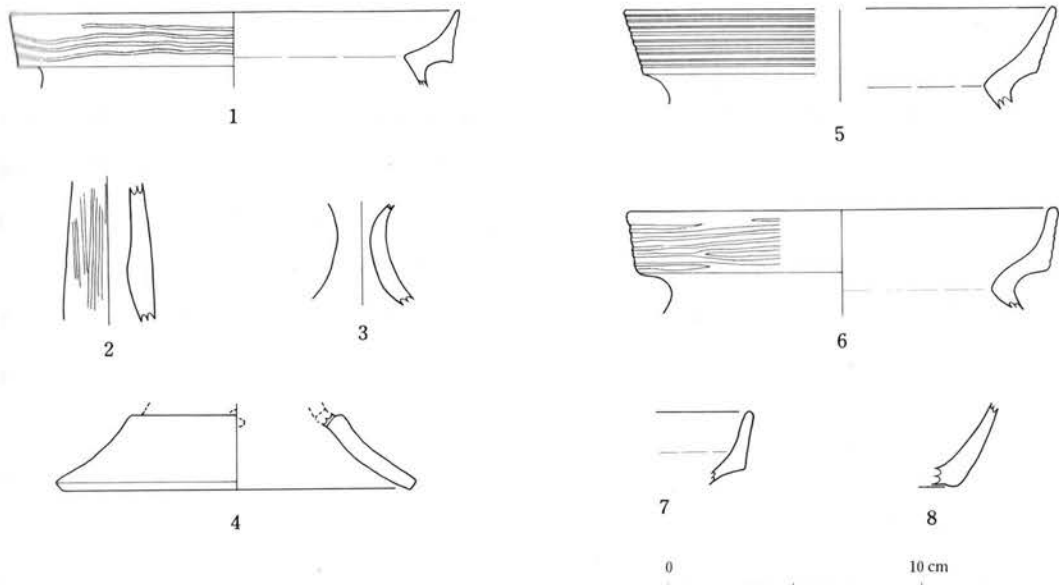


図 17 河田山 1 号墳出土土器

ており、特に 1 では口縁部外面下端に稜を形成するに至っている。擬凹線は 4～6 条引かれている。しかし、5 の土器については、口縁部の外傾度がやや大きく、口縁部から頸部に至る屈曲もやや甘く、擬凹線も 9 条と多いことから、他の甕形土器とは区別される観がある。しかし、出土状況からみても、ここでは一応同一種として扱っておきたい。

高坏または器台形土器 高坏形土器では脚部であると考えられる 2 を確認している。下方へやや広がりをもせるラップ状、若しくは有段棒状のものと考えられる。4 は高坏または器台の脚部であろう。外面には段を有し、またその箇所には径約 6 mm の透かし穴を持っている。しかしながら、擬凹線文やスタンプ文などの加飾は認められない。

蓋形土器 通気口を持つ鈕部が 1 片確認されている。

以上のように、出土土器をみてきたわけであるが、ここで一応これらの土器の編年的位置づけについて考えてみたい。しかし何分少量の土器からの観察であり、今後とも十分な検討を行うことが必要であろう。

甕形土器についてみると、口縁部が直立またはやや外傾し、そこから頸部にかけての屈曲が鋭いという特徴は、金沢市南新保三枚田遺跡 1 号溝出土土器 A 4 類⁽²⁾に類似するものである。

しかし、今回出土した土器の中には、三枚田遺跡で若干みられるような、口縁部内面に連続する指頭圧痕を持つ土器はみられない。この指頭圧痕とは口縁部部にクシ歯状工具で擬凹線を

施文するにあたり、その外面からの圧力と均等な圧力を内面から施すため生じたものであろうとされている⁽³⁾。この時期の擬凹線文がかなり定型・規格化したものであり、かなりの熟練を要するものであったとすると、今回出土した土器が指頭圧痕を伴っていないことは、土器生産を行った集団はこのようなかなり規格化した製品を生産するような、ある一定水準の技術を持ち得る段階まで達していなかったことを示すと考えられる。

以上のように、形態の明らかな甕形土器のみから出土土器の時期を考えると、谷内尾晋司氏の編年⁽⁴⁾による法仏Ⅱ～月影Ⅰ式期、吉岡康暢氏の編年⁽⁵⁾による塚崎Ⅰ～Ⅱ式期に求められ、弥生末期のものであろうと考えられる。

4. 小 結

1) 本墳の持つ性格と背景について

河田山1号墳の墳丘形態・立地について次のような特徴があげられる。

- ①本墳は集落から大きくかけ隔てられた丘陵上の、眺望視野の広い適所に、しかも単独で存在している。
- ②墳丘の西側が東側に比べ、かなりの標高差で下位にある。
- ③前方部前端が不明瞭で、後方部に比べ未発達である。
- ④後方部墳頂付近を除いては盛土がみられない。
- ⑤墳頂部平坦面が広い。

等である。

①については、この古墳の選地が、山中他界観の強い影響の下で行われたことを示すと考えられる。②についても同様で、墳丘西側を下位にすることは即ち、古墳を尾根中央よりも平野側に寄せて築いたことを意味し、そうすることによって、古墳を平野側から見た場合、最大限に大きく見えるようにしたものと考えられる。

以上の立地上の特徴から次のことが言えよう。即ち農耕の発達の中、首長が生産力と集団の統一を体現してくると、その生産力の保持・発達、あるいは集団の安泰を願う祭祀の中でも、首長が祭祀全体を優位的に司祭するようになった。すると、その「祭祀を通じて部族首長の現実の規制力は、呪的靈力に含まれて神秘性を帯び、集団成員から次第に超絶した性格を持つようになる⁽⁶⁾。」こうして集団成員から超絶するに至った首長は、その死後、集団全体の根源であるところの祖霊神としての性格を持つようになり、全ての祭祀の中でも特に重要な意味を持った「祖霊祭祀」の中で、祖霊＝首長の葬送儀礼は盛大を極めるようになった。その結果、首長の

遺体は、その靈威を祀るに相応しい場所に、相応しい形で葬られるようになったのである。

では、どのような形で葬られたのかと言うと、これには③以下の問題が関わってくる。墳丘自体の問題として、前方部の未発達さは、古墳出現以前の特定個人墓としての性格を持った区画墓の突出部における「道」的要素を多分に含んでいると考えられる。区画墓における突出部は主丘と外界を繋ぐ単なる道ではなく、「主丘を中心に展開された埋葬祭祀の一部或いは一過程を担う場」と考えられる。これが定型化した前方後円（方）墳の前方部になると、突出部がそれ自体として独立化、即ち「方形壇」に転化し、それと同時に、古墳出現以前の区画墓にみられたような「道」の意義は否定されてしまう⁷⁾。

このように考えると、河田山1号墳の前方部の形状は定型化した前方後円（方）墳となる以前の段階の所産であり、また盛土が後方にしかみられないことから、前方部は、いまだ墳丘そのものの一部としてよりも、“付属施設”としての突出部という、弥生時代以来の意義が根底にあったためと言えるのではないだろうか。また、墳頂部平坦面が広いことも、この場を利用して葬送祭祀を執り行ったと考えられている区画墓の影響を深く残していることの裏付けになろう。

結局本墳は、先述のように集団からかなり超絶した首長の奥津城としての性格の一端を持ちながらも、その形態は集団祭祀墓としての古墳出現以前の区画墓の影響を深く残していると言える。この二つの要素の共存は、墳丘形状と不可分な関係にある埋葬祭祀、さらには農耕祭祀を始めとする全ての祭祀に反映されていたと考えられる。

以上より、この古墳の被葬者は、集団に対する支配者というよりも、「集団の生産力を代表して集団に豊穡をもたらし得る特別な呪的靈力の保持者⁸⁾」としての性格がいまだ強かった段階にあったといえるのではないだろうか。

2) 築造年代について

本墳の築造年代については以前前田氏が、県内の主な前方後方墳と対比させて、相対的な年代的な位置づけを試みている⁹⁾。今回もそれと大きくかけ離れるものではないが、本章を改めてまとめるにあたって、若干気付いた点を述べておきたい。

前田氏は県内の前方後方墳の変遷として、〔加賀市小菅波4号墳・宇ノ気町宇気塚越1号墳〕⇒〔寺井町末寺山2、5、6号墳・小松市河田山1号墳〕⇒〔鳥屋町大槻11号墳〕⇒〔七尾市国分尼塚1、2号墳〕⇒〔鹿島町小田中親王塚古墳・鹿西町雨ノ宮1号墳〕、というようにしているが、その中でも河田山1号墳と相前後する古墳として、末寺山2、5、6号墳をあげている。

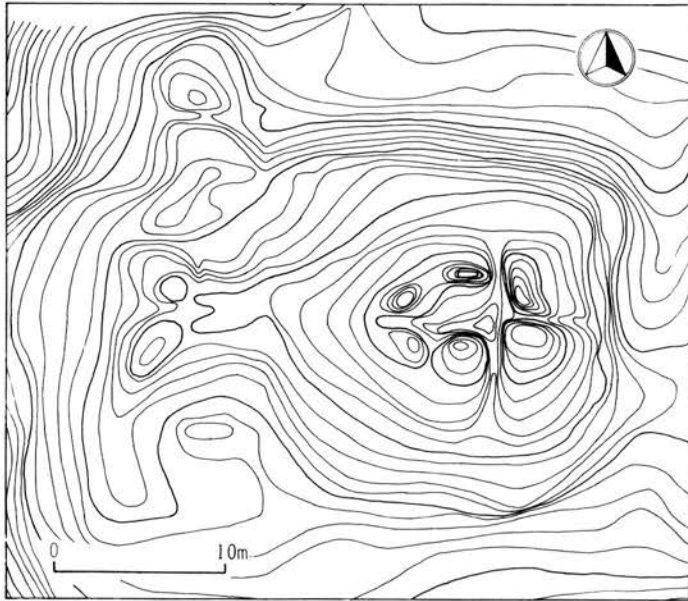


図18 末寺山5号墳（『和田山末寺山古墳群環境整備事業報告書』）

これらの古墳を比べてみると、墳形については、末寺山2、5、6号墳では、くびれ部の両側をすり鉢状に深く掘り窪め、周溝をめぐらせて、墳丘の立体化を図ると同時に、墳丘の外界からの隔絶をも強化しているが⁽¹⁰⁾、河田山

1号墳では周囲にテラス面がめぐるだけで、くびれ部の形状、墳丘裾部もそれ程明瞭ではない。

一方、立地についてみると、両者とも丘陵尾根に立地するものの、河田山1号墳は三方を急崖に囲まれた尾根上に、単独で立地するのに対し、末寺山の方は、3基の古墳が互いに近接して築かれており、また累世墓域でもある末寺山古墳群の中で個々の前方後方墳がそれ自体として隔絶した在り方を示すものではない。

よって墳丘の形態においては末寺山が、立地においては河田山が、より発展的に思われるが、末寺山におけるこの3基の古墳が、いかなる関係のもとで築かれたのか明らかでない⁽¹¹⁾以上、即断はできない。

しかし、上述の古墳の変遷の中で、小菅波4号墳・塚越1号墳・大槻11号墳・国分尼塚1号墳からは、いずれも古府クルビ式に相当する土器が出土しており、尼塚以前の個々の古墳の年代差はあまりないといえる。よって前回の考察と同様に、河田山1号墳の年代も、この古府クルビ式期の中に収まるものとした。

3) 墳丘東側で発見された溝状遺構と出土した土器について

上記の河田山1号墳の築造年代についての考察では、今回の発掘で出土した土器の年代観を全く無視してきた。これは、

- ①出土土器は全て流土中や古墳の東方で確認された溝状遺構から散在的に検出されている。

②いづれも細片ばかりである。

③表面の摩耗が著しいものが多い。

④口縁部外面に、煮沸時に付着したと考えられる煤が確認された甕形土器がある。

等の理由から、古墳に供献若しくは広義に付属していた土器⁽¹²⁾とは考え難いからである。

では、これらの出土土器や溝状遺構は、いかなる性格を持つものであるかという点、上にあげた③・④の特徴から、消費地型遺跡の遺物・遺構と考えるべきであろう。これらの土器は先述のように、法仏Ⅱ～月影Ⅰ式期に比定されるものであるが、ちょうどこの時期に相前後して、北陸地方には見晴らしの良い丘陵や台地などの「高所」に構えを持った集落が盛んに営まれている⁽¹³⁾。河田山で確認されたこれらの遺物・遺構も、このような「高所」に築かれた集落の残骸であり、河田山1号墳築造時に破壊されてしまったものではないだろうか。

一般に「高地性集落」と呼ばれる高所に営まれた弥生時代の集落は、瀬戸内海沿岸を中心として全国各地にみられるが、ここで問題となるのは、単に海拔高距が高いと言うよりも、日常生活の居住条件や水田耕作を営む低地からの比高であり、即ち日常生活や水田経営に不適當か不可能な、水田経営を営む農民にとって異常とも言える場所を選地していることである⁽¹⁴⁾。このことは河田山についても問題となろう。

これらの集落の機能として⁽¹⁵⁾、

①狩猟・焼畑農耕を行った縄文時代以来の伝統的生業を営む集落。

②農耕社会に発生した政治集団間の緊張に伴う軍事的防衛機能を持つ集落。

③低地の集落から分村した開拓集落。

④祭祀の施設。

が考えられてきた。この内①は、時代の大勢を占めていた水田経営の集落については、問題の対象となっていないし、③・④についても、主体的機能から派生した副次的機能とみることができ、これらを除外すると、それは②の軍事的防衛機能に限られることになるかとされている。

しかし、ある特定の高所に築かれた集落跡が、実際に軍事的防衛機能を持っていたか否かの証明は、集落全体を取り囲むような大規模な周溝・武器等の、それを裏付けるような遺構・遺物が確認されない限り難しい。

橋本澄夫氏による、県内の高所に築かれている集落の立地上の分類⁽¹⁶⁾によると、集落はA～Gの各タイプに分けられているが、河田山で発見した遺構が立地するのは、「F)背後に丘陵が延びている舌状台地に立地する」になると思われる。このタイプには類例が多く、金沢市塚崎遺跡、津幡町谷内石山遺跡、押水町竹生野遺跡、金沢市岩出ウワノ遺跡等があげられる。



図19 河田山古墳群

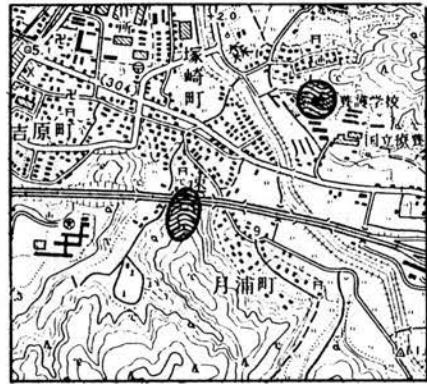


図20 塚崎遺跡・岩出ウワノ遺跡



図21 鉢伏茶臼山遺跡

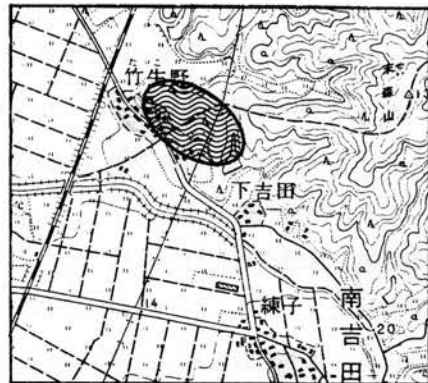


図22 竹生野遺跡

高地性集落の軍事的機能として、周辺地域および主要陸路の見張り、速報（狼煙）がまずあげられるが、このFタイプ集落の立地についてみると、この目的は十分に満足できるといえる。しかし、もう一つの機能である、“集落自体の防衛”についてはどうであろうか。Fタイプの地形の場合、少なくとも三方は崖・谷に画され、防衛の役割を果たすが、この際ポイントとなるのは、集落背後の、山地へと連絡する部分である。ここからの侵入・攻撃を防ぐには、その地形の特徴にも依るが、当然人為的な堀や土塁などの防御線を設ける必要があったであろう。この防御線の存否の検出が集落の機能を考える上での重要なポイントとなるが、県内のFタイプの集落で、まだその検出例はない。

しかし、この中の塚崎遺跡では、完形土器を含む多量の土器の遺棄や、住居の焼失が目立ち、また当時の生活必需品である鉄器が多量に遺棄され、玉生産を行っていた住居では、制作途中

で廃棄されていたこと⁽¹⁷⁾が注目される。これは恐らくこの集落が持つ交通上・水利上の利権をめぐって、実際に戦いが繰り広げられた事情を示すと考えられ、また逆に考えると、この集落自体が軍事的要求から造営されたということを示しているといえる。しかし、だからといってこの例から、高所に築かれた集落が全て軍事的な機能を持つものであるとはもちろん言えず、河田山も含めて、今後十分に検討する必要がある。

ところで、高所に築かれた集落があるような地形は、出現期古墳の立地する地形とも合致しており、事実寺井町和田山古墳群や、七尾市国分尼塚古墳群等では、古墳の下層や、若しくは隣接して、月影期などの弥生末期の土器が検出された例がある。

即ち、高地性集落の軍事的目的と、出現期古墳の山中他界観に基づく区画墓の築造という目的の間に、差はあるものの、求めた地形条件は同じだったと言えるのである。

とは言え、この二つの目的はあまりにも違っている。軍事的目的とは言え、一般生活の場と、墓域設定としての一種の聖域とは、大きく隔たっているものである。となると、このギャップを埋めるには、集落という卑俗な地であったことを忘却するに足る十分な時間を置いた後、或いはある種の昇華のもと、この地が聖域として考えられるに至ったと考えるしかない。

河田山1号墳の造営主体と、それ以前の遺構の造営主体との間に、実際いかなる事情があったのかは、まだ明らかではないが、河田山をめぐるの軍事上の拠点（一般生活の場）から、集団首長墓の墓域という発想の転換に、梯川流域における弥生時代から古墳時代への転換点を垣間見ることができるのである。

註

- 1 田嶋明人ほか『江沼古墳群分布調査報告』石川考古学研究会（1978）
県内主要古墳群分布調査第2年度の際、関連地域の分布調査として、当地を踏査した結果、本墳が発見された。
- 2 宮本哲郎・楠正勝『金沢市南新保三枚田遺跡』金沢市教育委員会（1984）
- 3 谷内尾晋司「北加賀における古墳群出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会（1983）
- 4 谷内尾晋司「前掲書」註（3）
- 5 吉岡康暢ほか『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』石川県教育委員会（1976）
- 6 近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店（1983）
- 7 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究 103号』考古学研究会（1979）
- 8 近藤義郎『前掲書』註（6）
- 9 前田清彦・金沢大学考古学研究会「河田山1号墳第1次発掘調査報告」『北陸史学 32号』（1983）
- 10 『和田山・末寺山古墳群環境整備事業報告書』寺井町（1983）
- 11 末寺山ではこの3基以降も、6世紀前半あたりと推定される7号墳を始めとした古墳が継続的に築かれており、古墳相互の墳丘の切り合いも今のところ認められないことから、この古墳群を、同一首長系列による累世

墓域と考えるのが一般的である。こう考えると、この3基の古墳の墓域設定も、恐らくは近親者同士で墓域を分かち合った結果と考えるべきであろう。

- 12 酒井龍一「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」『考古学研究 94 号』考古学研究会（1977）

古墳出現期における甕形土器は、この時期における古墳造営に伴う大規模な労働力を養うために大量に生産された煮沸用具であるとされており、本来的には墳墓に供献するものではない。出土した土器が墓前においての煮沸を伴った祭祀に使われたものだとする考え方もあるが、土器の出土状況・位置からいって、そう考えるのは不自然である。器種構成からいっても、甕形土器に主流を置く構成は、古墳出現期の集落跡に共通してみられるものであって、河田山もその域を出るものではない。供献土器ならば、壺・埴・高坏類に主流を置くべきであろう。

- 13 谷内尾晋司・栃木英道ほか『金沢市北安江遺跡』石川県立埋蔵文化財センター（1985）

吉岡康暢ほか『前掲書』註（5）

- 14 小野忠熙『高地性集落論』学生社（1984）P 126～132

- 15 小野忠熙『前掲書』註（14）P 209～212

- 16 橋本澄夫ほか『国分高井山遺跡』七尾市教育委員会・国分高井山遺跡発掘調査委員会（1984）

- 17 吉岡康暢ほか『前掲書』註（5）